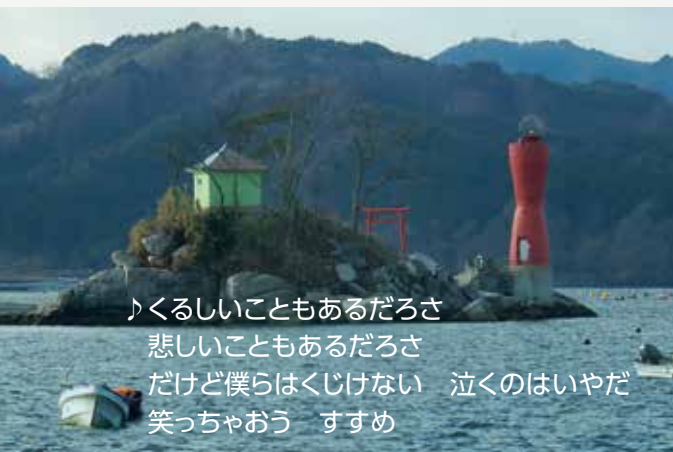




♪くるしいこともあるだろうさ
悲しいこともあるだろうさ
だけど僕らはくじけない 泣くのはいやだ
笑っちゃおう すずめ

蓬萊島(通称ひょうたん島)

NHK人形劇「ひょっこりひょうたん島」のモデルになったといわれる島。従来あった赤い灯台は、津波で根元から折れ、大きな被害を受けたが、祭られていた弁天様は奇跡的に流失を免れた。大槌町復興のシンボル。写真の灯台は平成24年12月に再建



三陸大津波の記念碑

「先人の教訓を守れていなかった」と話す場面でスクリーンに映された、昭和8年に建てられた記念碑。〈地震があったら津波の用心せよ、津波が来たら高い所へ逃げよ、危険地帯に居住するな〉と刻まれ、町の各地区に建てられている



防潮堤

岩手県沿岸は、過去に何度も津波被害を受けていたことから、昭和35年のチリ地震津波以降に高さ6.4mの防潮堤を立ち上げた。「今回の津波も〈防潮堤があるから大丈夫〉と存在を過信したことが、甚大な被害につながってしまったのでは」と平野町長は語る

区分	項目	人数
死亡	身元判明者数	814人
	行方不明者数	420人
	関連死	51人
人口推移	平成23年3月11日	15,994人
	平成27年10月1日	11,732人

(国勢調査速報値)

職員の心身も危機的状況に

市街地は道もなく、がれきの山と化しました。地震と津波による山火事は、発生から25日目の4月5日に鎮火しました。暖房器具や灯油も乏しく、心も体も冷え切っていました。各避難所でもライフラインが分断

だんだん沈んでいく姿を、ただ見ていることしかできませんでした。その時は、あまりの光景に涙を流すこともできませんでした。
当日は雪がちらちらと降る寒い夜で、プロパンガスが爆発する「バーン、バーン」という大きな音だけが響いていました。大画面で戦争映画でも見ているような、非現実的な感じでした。庁舎内で生き残ったのは、私を含めて22人。家族や同僚の安否を気にしながらも、庁舎屋上で助けを待つしかありませんでした。

「公助」の限界

「役場はあてにできない」。これが住民の声でした。避難住民は漂流していたがれきを集めて火を燃やしたり、ドラム缶を拾い、湯を沸かして風呂を作ったり、自然発生的に避難住民による避難所運営が始まりました。

あの日を忘れない 被災地の今

～東日本大震災からの教訓～

図 危機管理課 ☎(235)4790



平成23年3月11日。あの日起こった未曾有の災害は、日本中の人たちの防災意識を変える大きなきっかけとなりました。震災から5年。被災地には今もなお、元の生活に戻ることができずにいる人が多くいます。あの日のことと、現状を正確に知ることが、今、私たちに必要とされていることではないでしょうか。復興への道のりは、長く遠いもので

す。復興事業を支えるために、全国の自治体からは多くの職員が震災直後から派遣されています。市からの今年度の派遣職員は、岩手県大槌町、宮城県石巻市、福島県相馬市に1人ずつの計3人。今回は、「海老名市防災講演会」での平野大槌町長による講演内容の抜粋と、派遣職員の現地からの報告などを紹介します。

3月11日14時46分頃

私はあの日、20、30代の直属の部下を5人、目の前で亡くしました。あの時のことを思うと、今でも生き残った後ろめたさがあります。私を含め、被災した人たちの人生は、あの日を境に大きく変わりました。
地震直後、庁舎前に災害対策本部を設置しました。完全にインフラは途絶、机と椅子を並べただけの対策本部でした。本部設置時に職員は50人位いましたが、その時に津波が襲ってきました。50メートル前に、真っ黒い壁が迫ってきたように見

非現実的な屋上での一夜

庁舎玄関前にいた私は、少しでも高いところへ行くため、屋上につながる3階に向かって走りました。
屋上から見た庁舎周辺は、まるで海のように、津波で流されてきたがれきでいっぱいでした。その中に、上半身だけが出ている私の部下がいました。5メートルの距離にいましたが声を掛けることしかできず、



講師／平野公三大槌町長

大槌町総務課職員として業務中に津波が襲来。震災当日は自身も庁舎屋上で一夜を過ごす。津波の甚大な被害により、当時の町長を含む40人の職員が犠牲となった中、町長職務代理者として町政運営の陣頭指揮をとった。平成27年8月、大槌町長に就任。『ひょっこりひょうたん島』の歌詞(3面参照)を胸に、私は難局に立ち向かっていきます。怒りや悲しみ、これを安心な未来に転換することが私の使命」と、講演会の最後を締めくくった

1月16日に開催した「海老名市防災講演会」より抜粋

「災害時における住民の行動、 共助による支援体制のあり方」